

食卓と農業の距離を縮め、 いつものごはんをもっと美味しく。

毎日、食卓にのぼるごはん。味や形は知っていても、誰が、どこで、どのように作っているのか、知らない人も多いかもしれません。

身近な作物を栽培・収穫する機会を子どもたちに提供し、農業や地域社会、自然環境への理解を深める取り組みが食農教育。

JAグループでは、地域の農家や青年・女性組織のメンバーらと連携し、各地で行っている。

今日は待ちに待った稲刈りの日。

稲穂が黄金に色付き、トンボが舞う10月の田んぼに、目を輝かせた小学生が集まっていた。

やり方を農家から教えてもらいながら、鎌で丁寧に刈り進めていく。

「イナコがいる」「カエルだ」。日頃は踏み入れることのない田んぼに、子どもは興味津々。

「次はあっちを取ろう」

「いつも食べているごはんは、こんなに手間と時間がかかってできているんだ」

「暑い時も寒い時も、農家が頑張ってお米や野菜を作ってくれていることが分かった」。

一人ひとり気付いたことは異なっているけど、

一回り大きくなったのは、皆、同じ。

収穫の喜びや楽しさを感じることで、いつものごはんをもっと美味しく感じるはず。

食の大切さや食と農のつながりを体感し、

子どもたちに健やかに成長してほしい。

それが私たちの願い。



Scene.9
食農教育



知って納得JA

Q JAはなぜ銀行や保険会社のような事業をしているの？

A 信用・共済事業を通じて、組合員の営農とくらしを守り、より豊かにするためです。

協同組合のルーツの一つは信用・共済事業です。特に農村では、地域の人々がお金や米を出し合って積み立て、そこから困った人がお金を借りたり、災害に遭われた人にお金や米を援助したりするなどの仕組みが、草の根的につくられてきました。こうした地域の「相互扶助」の仕組みが、信用・共済事業として発展してきました。

JAの信用事業は、組合員間で資金を積み立てて融通し合うので「相互金融」と呼ばれ、組合員の営農やくらしに役立てられています。

JAの共済事業は、互いを信じ救い合う「相互扶助」の精神の下で行う非営利事業です。組合員のくらしを守るため、「ひと」「いえ」「くるま」などの保障を充実させています。



耕そう、大地と地域のみらい。

